

西隆寺跡第 9 次調査の成果

奈良市埋蔵文化財調査センター 調査係

主務 吉田朋史

1. はじめに

今回の調査地は、平城京の条坊では、右京一条二坊十坪の南部、西隆寺の寺域の東南部にあたります。調査区の南側には 1971 年に奈良国立文化財研究所が調査し、西隆寺の塔のほりこみじょう掘込地業として報告されています。この遺構については、当時の事業者の理解と協力を得て設計変更により保存され、花壇として整備し公開されてきました。しかし、土地所有者が変わり、当該地で新たな開発事業が計画され、保存協議を行いました。現状保存は不可能という結論に達したため、発掘調査を行いました。

2. 1971 年(第 2 次)と 1973 年(第 6 次)の調査（西隆寺跡調査委員会）で分かっていたこと
・塔とみられる基壇建物 1 棟・寺域の南を限る大垣 1 条・掘立柱建物 1 棟・井戸 4 基などが検出されていました。

◎塔とみられる基壇建物

基壇築成前に行われた掘込地業の痕跡を検出したのみで、基壇そのものは削平されて残存していなかった。平面形状は、隅丸方形で、南北 6.2～6.0m・東西 5.6～6.0m、北辺で方形の張出しを確認している。掘込地業の深さは約 0.7m。砂と粘土に瓦片や礫を混ぜ、地業を行っている。基壇化粧石は確認されていない。

◎南面築地

1973 年発掘区南部で、黄褐色粘土の高まりがみられ、築地の位置を確認している。築地基壇の幅は約 3.0m で基壇中央部には幅 1.7m の高まりがみられ築地本体と推定されている。

◎掘立柱建物

7 間×3 間の南面廂付の東西棟建物。柱間は桁行梁行とも 3m、廂の出は 2.65m。井戸との位置関係から西隆寺造営以前の遺構と推定されている。

◎井戸

1971 年発掘区で 2 基、1972 年発掘区で 2 基確認し、内 3 基は掘立柱建物との位置関係や出土遺物から西隆寺造営以前の井戸と推定されている。

3. 今回の調査（第 9 次）で明らかになったこと

掘込地業を行う建物 1 棟・掘立柱建物 4 棟・掘立柱列 3 条・井戸 1 基等を確認した。

◎掘込地業を行う建物（SB01）

- ・平面形状 隅丸方形の土坑。

- ・規模は南北約 6.5m・東西約 5.7m・深さ約 0.7mである。北辺中央には張り出しがある。
- ・底面中央には不整形な土坑が掘られている。土坑は東西約 1.9m・南北約 1.7m・深さ約 0.3mである。
- ・掘込地業の最上層は小礫で覆われており、以下は約 0.2～0.4mの礫を混ぜ込んだ黒褐色・黄褐色粘土と砂で埋められている。西辺部は軟弱地盤のため、下層まで入念に礫を入れて地盤改良を図っている。底面中央の土坑からは瓦が重層的に出土した。
- ・出土した軒丸瓦(6236F)・軒平瓦(6775A・6761A(新))の年代観から 8 世紀末以降に構築されたと推定。→主要伽藍より遅れて構築された可能性あり。

掘立柱建物

前回の調査で 7 間×3 間の南面廂付東西棟建物とされていたが今回新たに北側を調査したことで、北面にも廂を確認し、両面廂付東西棟建物 (SB02) であることが明らかになった。また、小規模な掘立柱建物 3 棟を確認した。

掘立柱列

SB02 の北廂の柱列から北に 5.4mの位置で 4 間以上の東西方向の掘立柱列 (SA03)、南北方向の掘立柱列 2 条を確認。(SA03 は SB02 と柱列を揃えていることや柱間も 3 mと共通することから SB02 と同時期と推定できる。)

井戸

方形の井戸枠がある井戸 (SE04) を確認。構造は、隅柱横板・丸太組。重複関係から SB01 より古いことから、西隆寺の寺域になる以前の遺構である。

検出遺構や出土遺物から西隆寺の寺域になる以前の宅地として少なくとも 2 時期以上の変遷があると推定できる。

4. 掘込地業の構造と類例

掘込地業とは、礎石建物などを建てる際、地面を一旦掘り下げ、土を突き固めるなどして埋め戻す地盤改良の工法のことです。建物の範囲全体に施す「総地業」、礎石の下の部分などに施す「壺地業」、礎石列にあたる部分などを溝状に掘り込んで埋め固めた「布地業」があります。

今回検出した掘込地業は建物範囲全体に施す「総地業」にあたります。

SB01 の工事手順を遺構にもとづいて復元すると以下ようになります。

1. 建物の範囲を深さ 0.7m以上掘り下げる。

2. 底面中央に直径 2 m 弱の土坑を掘り下げる。
3. 底面中央の土坑に粘土質の土壌と瓦を重層的に入れて埋める。
4. 地盤の弱い西半に特に多く礫を入れ、その上に黒褐色・黄褐色の粘土に礫を混ぜながら埋める。
5. 小礫を混ぜた土で埋め固める。

通常はこの上に基壇を構築し、礎石を据え建物を建てますが、今回の調査では礎石の据え付けや抜き取りに関する痕跡を確認できませんでした。底面中央をさらに掘り下げて入念に埋め固めていることから、礎石下方にあたる位置での壺地業と解釈できる可能性があります。

また、地業に際しては土を薄い層状に突き固める「版築」という工法を用いることが多いのですが、今回の例のように礫を混ぜ込む例もいくつか見受けられます。

大阪府由義寺跡の下層塔基壇（奈良時代中頃）の掘込地業は、総地業の可能性があります。内部には 0.2～0.5m の花崗岩が混ぜ込まれていることが報告されています。

西大寺の弥勒金堂では、礎石の下と考えられる壺地業の中に大ぶりの礫や瓦が混ぜ込まれていました。

5. おわりに

今回の調査で、昭和 46 年に検出された掘込地業を行う建物を再発掘して完掘したため、掘込地業を行う際に礫を混ぜ込む技法や底面中央の土坑を新たに発見するなどその構造をさらに明らかにすることができました。しかしながら、上部構造である基壇が削平されていることや小規模な掘込地業であるため、建物の性格を断定するには至りませんでした。今後の調査事例の類例や新資料の発見を待つ必要があります。

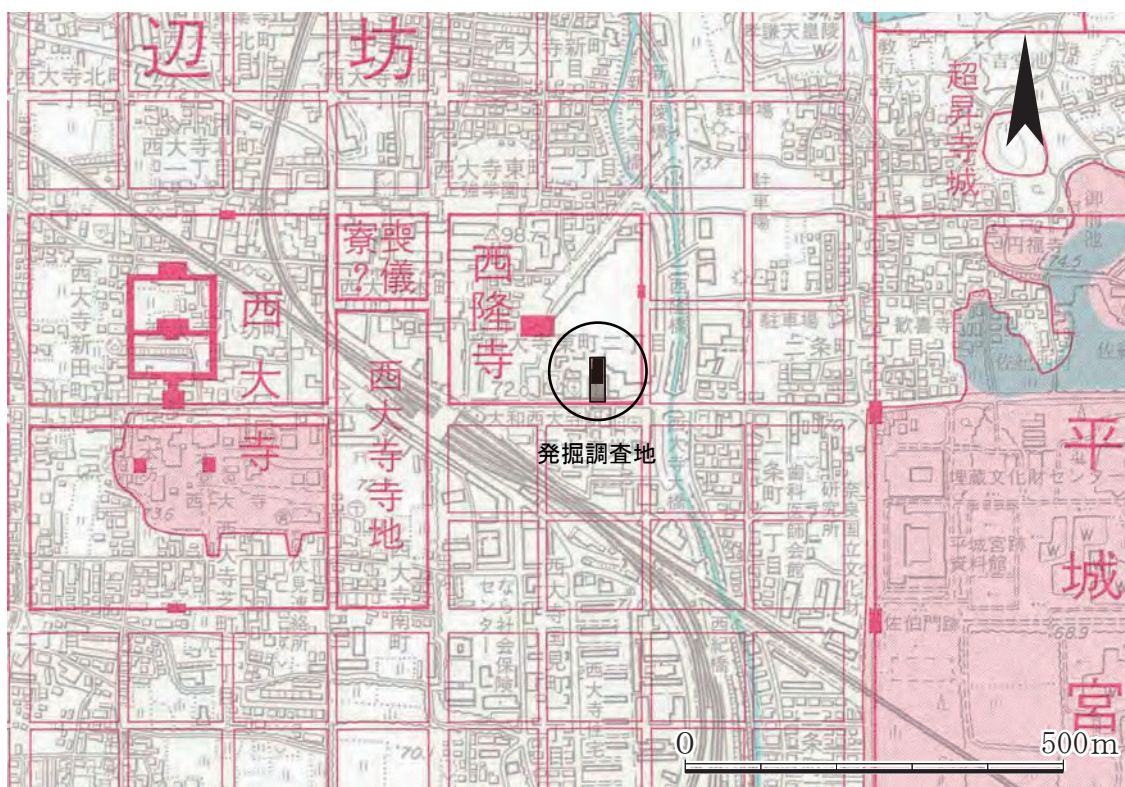
また、新たに北側部分でも発掘調査を行ったことで、比較的大型の両面廂付東西棟建物（SB02）や付随する掘立柱列（SA03）、方形隅柱横板・丸太組の井戸を新たに確認したことで、西隆寺造営以前の十坪南東部の宅地の様相が明らかになったことは、貴重な成果といえます。

【主要参考文献】

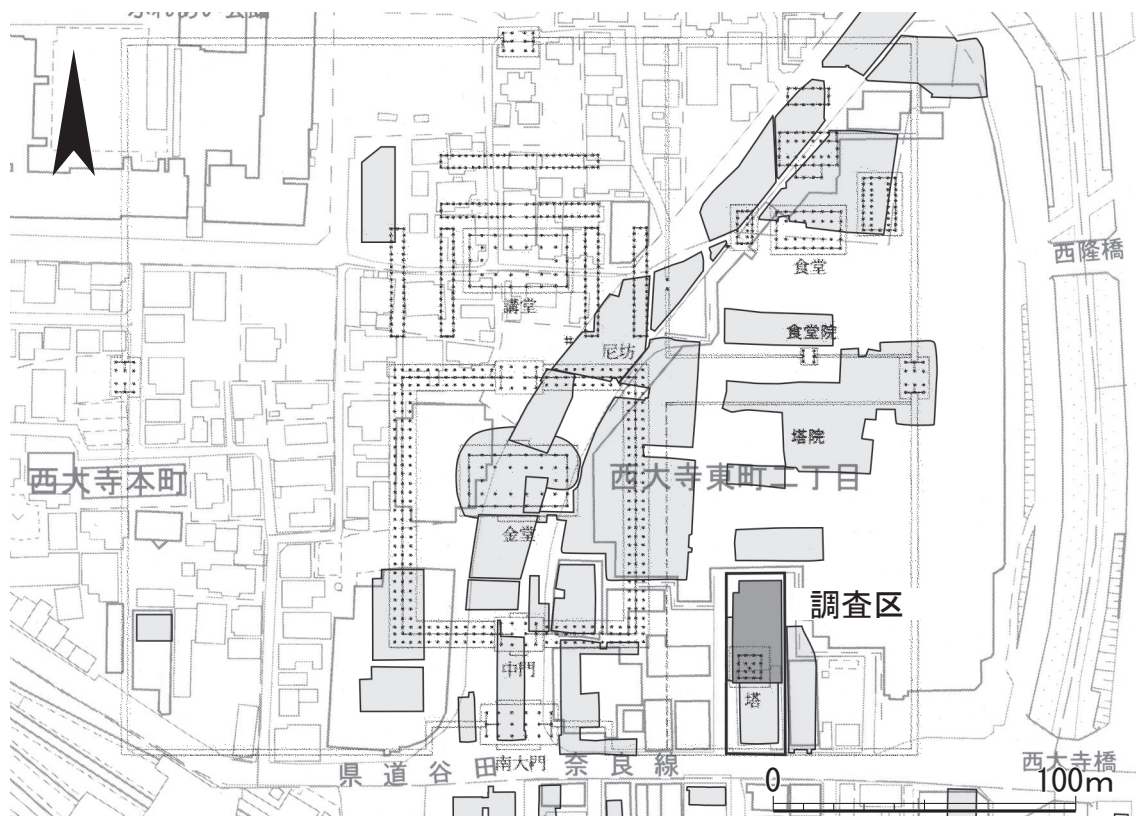
西隆寺調査委員会 1976 『西隆寺発掘調査報告書』

奈良国立文化財研究所 1993 『西隆寺発掘調査報告書』

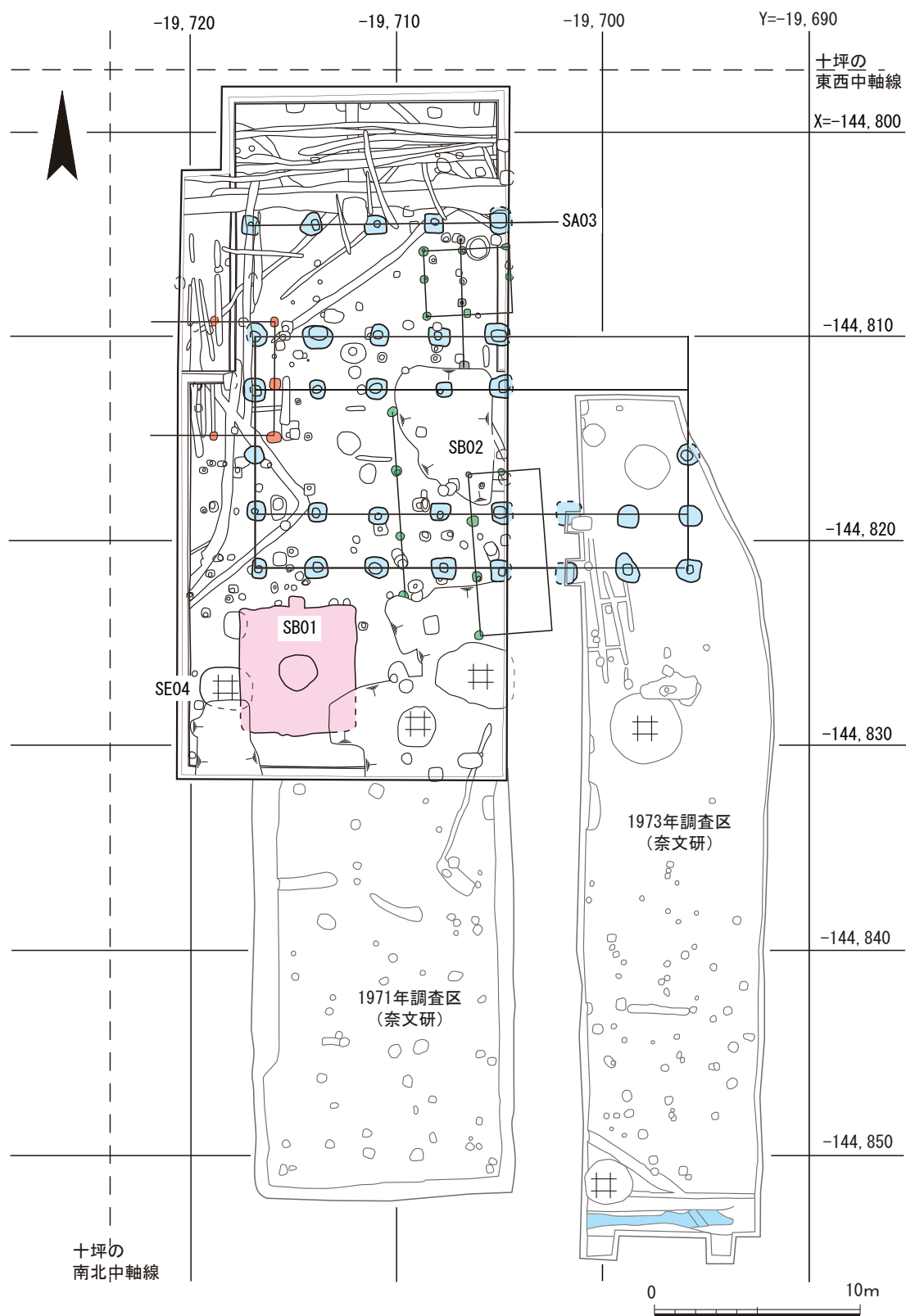
独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 2003 『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』



発掘調査地位置図 (S=1/10, 000)



西隆寺跡の周辺調査 (1/2, 500)



調査区遺構平面図 (1/300)



発掘区遠景 空撮（南から）



発掘区南部 空撮（垂直・上が北）



掘込地業を行う建物 SB01（南西から）



掘込地業を行う建物 SB01 堆積状態（東から）



SB01 掘込地業底面中央の土坑（東から）



井戸 SE04 井戸枠出土状態（南から）